

修士論文（要旨）

2013年1月

介護福祉士によるアセスメントプロセスの検討
—利用者理解を深める介護過程の分析を通して—

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

211 J 6009

倉持陽子

目次

I	緒言	1
1.	研究の背景	1
1)	「介護福祉士」資格創設の背景	1
2)	介護ニーズの多様化と専門性構築の必要性	1
3)	介護福祉士養成と介護過程の教育	1
4)	介護過程研究の現状と課題	2
2.	研究の意義と目的	3
3.	アセスメントの定義	3
II	研究方法	3
1.	調査対象	3
2.	調査方法	3
3.	分析方法	4
4.	倫理的配慮	5
III	結果	5
1.	カテゴリー構成	5
2.	カテゴリーの詳細	5
1)	介護福祉士が持つべき力	5
2)	利用者のより良い生活を支える使命	7
3)	利用者の総合的理解	9
4)	利用者本位の生活の実現	11
IV	考察	13
1.	ストーリーライン	13
1)	介護福祉士が持つべき力	13
2)	利用者のより良い生活を支える使命	14
3)	利用者の総合的理解	15
4)	利用者本位の生活の実現	16
2.	介護過程におけるアセスメントの捉え方	16
1)	生活の視点からの個別理解の重要性	16
2)	介護実践とともにあるアセスメント	17
3)	尊厳を支える介護であるために	19
3.	介護保険施設における介護過程展開の実際と課題	20
4.	利用者理解を深める介護過程と介護過程教育の課題	23
5.	今後の課題	24
V	まとめ	25
	謝辞	
	文献	
	資料	

要旨

本研究は、介護福祉士が生活支援という介護の独自性を活かし、アセスメントにおいてどのように利用者理解をして生活課題の明確化に至るのか、そのプロセスを明らかにし、介護におけるアセスメントの特徴を追究することを目的に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行った質的研究である。

介護保険施設（介護療養型医療施設を除く）で勤務する実務経験5年以上の介護福祉士10名を対象にし、半構造化面接によりインタビューを行った。主な質問内容は、アセスメントの捉え方、情報収集と情報分析の行い方、情報収集と情報分析における成功や失敗、分析をして課題を明確にしたことによって利用者理解ができた実感すること等であった。

分析の結果、4カテゴリーと16サブカテゴリーを確定した。これらは、76の概念から導かれた。以下のストーリーラインを生成した。

介護福祉士による介護過程のアセスメントは、〈対人援助のモチベーション〉や〈対人援助コミュニケーション力〉〈意識を集中した観察〉〈記録シートの活用〉〈総合的知識力〉といった[介護福祉士が持つべき力]を統合し、[利用者のより良い生活を支える使命]に基づいたチームケアによる介護実践のなかで行われている。それは〈利用者中心の関わり〉であり、〈緊密な関係づくり〉や〈介護チーム力の集結〉によって進められ、知り得た情報は〈情報媒介者としての使命〉に基づいて介護チームで共有し、さらに他職種にも伝達している。このような利用者との関わりやチームケアによって〈介護福祉士としての成長〉を遂げている。これら介護職チームによるアセスメントは、〈身体・心理・社会面を捉える視点〉を持ち〈情報収集・分析によるニーズや目標の把握〉に基づいて行われるが、〈ケアマネジメントとの連動〉を図り多職種連携によるアセスメントによって[利用者の総合的理解]へと深まっていく。このアセスメントは[利用者本位の生活の実現]となることを目指して実践されており、その過程では〈最善を導くための葛藤〉が生じ、この葛藤によって利用者のより良い生活とは何かを常に問いながら、介護実践とアセスメントを同時に行っている。この葛藤は〈介護福祉士としての成長〉にも影響を及ぼしている。[利用者本位の生活の実現]に到達したか否かは、利用者の様子から〈利用者の望む姿の実現〉ができたことを介護福祉士自身が実感することで判断している。このようなアセスメントにより利用者理解が深まり、その結果として到達できる[利用者本位の生活の実現]は、再び〈対人援助職のモチベーション〉に影響を及ぼすことになる。一方で、[介護福祉士が持つべき力] [利用者のより良い生活を支える使命] [利用者の総合的理解]が相互に作用してプラスの影響が及ばない場合には〈アセスメントの未成熟化〉となり、利用者理解を深め[利用者本位の生活の実現]を導くアセスメントには至らない。

本研究は、分析テーマを「介護保険施設における介護福祉士によるアセスメントプロセス」、分析焦点者を「介護保険施設に勤務する介護福祉士」として分析した。現職の介護職に限定せず、ソーシャルワーカーの職務に就く介護福祉士からの語りを含めた分析であることから、介護保険施設におけるソーシャルワークとケアワークの連続性や、ケアマネジメントと介護過程の連動などの包括的な動きを捉えることができた。一方で、介護職の立場に限定したより詳細なプロセスを分析することには限界があった。今後、分析テーマと分析焦点者をさらに限定した分析が必要と考える。

引用文献

- 1) 井上千津子：介護方法論-2-生活援助の理論化--介護過程を通して。京都女子大学生活福祉学科紀要，1：9-15（1994）。
- 2) 矢部弘子，小林朋美，寺島洋恵：介護概論における介護過程の概念に関する諸説の検討。聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要，3：35-47（2005）。
- 3) 黒澤貞夫，上原千寿子，川井太加子ほか：介護福祉士養成新カリキュラム教育方法の手引き。33，日本介護福祉士養成施設協会，東京（2008）。
- 4) 一番ヶ瀬康子，井上千鶴子，根本博司ほか：新・介護福祉学とは何か。6-9，ミネルヴァ書房，東京（2000）。
- 5) 前掲書1)
- 6) 古賀陽子：介護過程の理解へ向けて。九州大谷研究紀要，29：150-134（2003）。
- 7) 久保田トミ子，吉田節子，佐藤富士子ほか：新・介護福祉士養成講座9 介護過程。3，中央法規出版株式会社，東京（2009）。
- 8) 同掲書。29，
- 9) 前掲書4)。34，
- 10) 三好明夫，奥津文子，井上桜ほか：介護福祉学－介護福祉士の専門性と独自性の探究－。86-87，学文社，東京（2006）。
- 11) 一番ヶ瀬康子ほか：セミナー介護福祉12 介護概論。7，ミネルヴァ書房，東京（1993）。
- 12) 杉山せつ子：聖隷学園における介護福祉教育と介護過程研究の変遷－介護過程の展開ツールの作成に至るまで－。聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要，6：37-51（2008）。
- 13) 白澤政和，橋本泰子，竹内孝仁ほか：ケアマネジメント講座 第1巻 ケアマネジメント概論。8-9，中央法規出版株式会社，東京（2000）。
- 14) 同掲書。2，
- 15) 石野育子：最新介護福祉全書別巻2 介護過程。第2版，13，メヂカルフレンド社，東京（2005）。
- 16) 白澤政和：介護福祉の本質を探る－ソーシャルワークとの関連で－。介護福祉学，13（1）：15-23（2006）。
- 17) 前掲書7)。200，
- 18) 大森六郎，斉藤富美子：介護保険制度におけるケアマネジメントと介護過程の関連性について。旭川大学女子短期大学部紀要，40：1-22（2010）。
- 19) 一番ヶ瀬康子：介護福祉学の探究。9，有斐閣，東京（2003）。
- 20) 岡本千秋ほか：介護福祉学。46，中央法規出版株式会社，東京（2002）。
- 21) 同掲書。65，
- 22) 厚生労働省：新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例。
www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei03.pdf
- 23) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い。弘文堂，東京（2003）。
- 24) 木下康仁：ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて。弘文堂，東京（2007）。